

2018年10月20日

日本キリスト改革派教会

大会 宣教と社会問題に関する委員会

「天皇『代替わり』の諸行事に関して政教分離と国民主権の原則を厳守するよう求める声明」の解説

主の御名を讃美します。

「昼も夜も決して黙してはならない。主に想い起していただく役目の者よ。決して沈黙してはならない。」(イザヤ書 62:6)

この度、日本キリスト改革派教会では先の第73回定期大会(2018年10月8日~10日)において、「天皇『代替わり』の諸行事に関して政教分離と国民主権の原則を厳守するよう求める声明」を出すことを決議しました。

その理由は、政府が、2019年4月30日から約1年かけて行われる天皇「代替わり」諸行事(天皇の退位・即位に関わる諸行事)を、30年前に行われた裕仁天皇の代替わりの時と同様、天皇を現人神とする戦前の国家神道体制下で定められた「旧皇室典範と登極令^{とうきょくれい}」を踏襲し、皇室神道の儀式として行おうとしているからです。

このような神道的儀式を国事行為として行い、そこに国費を支出することは、日本国憲法の政教分離、国民主権の原則に根本から反します。さらに、イエス・キリストを「すべてのものの上にある頭」(エフェソ1:23)、「地上の王たちの支配者」(黙1:5)であり、教会と国家の主であると告白する(創立30周年記念宣言「教会と国家にかんする信仰の宣言」)私たちキリスト者にとっては、まさに信教の自由、良心の自由への侵害に他なりません。なぜなら、国事行為として行い、国費(国民の税金)を支出するということは、憲法における主権者であり、納税者である私たち国民全体の権利を無視することであり、私たちさまざまな宗教的立場にある国民がなんら同意抜きで、そのような儀式に強制的に参加させられることになるからです。

したがって、私たちは、教会全体として、今回の天皇「代替わり」行事に対し、政教分離と国民主権の原則を厳守することを政府に強く求めると共に、「代替わり」行事の内、特に神道神話に基づいて、天照大神から授かるとされる「三種の神器」等を継承する「剣爾等承継^{けんじとうしょうけい}の儀」、天皇の玉座である高御座^{たかみくら}から天皇が国の内外に向かって即位を宣言する「即位礼正殿^{そくいれいせいでん}の儀」を国事行為とすること、また、天皇が八百万の神々に五穀豊穰^{ごこくほうじょう}を祈り、神々と寝食を共にし、天皇霊の継承によって神格化されるとする「大嘗祭^{だいじょうさい}」に国費を支出することに対する反対の意を強く政府に申し入れました。

私たちの教会は、前回の天皇「代替わり」に際し、1988年第43回定期大会において、「皇位継承に関する我等の教会の立場を明らかにする」を決議し、それに基づき、要望、反対声明、抗議声明を出しました。また、大嘗祭に対しては、「『大嘗祭を国の行事にし、国費を使用することに反対する署名』運動の提案」を決議し(1989年第44回定期大会)、署名運動を行いました。したがって、今回も同様の侵害が繰り返されようとしている以上、国家に対する見張りの務めを委託されている教会として、政教分離の原則、国民主権の原則を厳守するよう求める声明を出すことは、教会の責任です。

今、日本全体を国家神道的価値観によって統合して行こうとする政治的力がふたたび強まっています。学校教育における「日の丸・君が代」の強制、戦前を美化した歴史修正主義の立場に立つ「育鵬社」などの教科書の各地での採用、憲法改悪の動き、道徳の教科化、在日コリアンに対するヘイトスピーチの蔓延、「教育勅語」を美化する政治家の発言など、極右的な政治的社会的運動や行動が、ここ数年一段と強まっています。ですから、私たちは単に天皇「代替わり」の問題に目を向けるだけではなく、その背後にある国家神道や旧日本への回帰を目指す極右的、全体主義的な動きに対して公に抗議していくことは、すでに「創立 30 周年記念宣言」（教会と国家にかんする信仰の宣言）において教会全体で確認した通り、イエスを主と仰ぐ私たちキリスト者にとって義務なのだ、という自覚を再度持つべきだと思います（三、国家に対する教会の関係（三）（専制への反対）、（四）（キリスト者の義務））。

かつての第二次世界大戦の時代、日本の国は、天皇を現人神とする国家神道体制の下で、人々の思想・良心・信教の自由を奪い、さらにアジア近隣諸国を侵略し、多くの命を奪いました。本来ならば、そのような過ちに対して積極的に反対すべきであった私たち日本のキリスト教会は、むしろ逆に国家の戦争政策に協力し、神の前に正しい証しをすることができませんでした。私たちの教会は、そのことを大会創立 30 周年記念宣言「教会と国家にかんする信仰の宣言」の序文において罪責告白いたしました。今、私たちはそのことをふたたび想起し、祈りをもって、信仰を証しする闘いへと導かれたいと願います。

「私たちは、今なお小さい群れであります。しかし、「恐れるな、小さい群よ」と呼びかけてくださる主は、歴史においていつも、小さい群れを用いて大きなわざを行なわれました。私たちも、教会と国家の主であるイエス・キリストの教会にふさわしく国家にたいして責任を果たすことができ、主の栄光が教会を通しても国家を通しても表わされるように、と祈ります。

願わくは、すべてのものを生かしてくださる神のみまえと、またポンテオ・ピラトの面前でりっぱなあかしをされたキリスト・イエスのみまえで、私たちが大胆に、この信仰を国家にたいして言い表わすことができますように。アーメン。」（創立 30 周年記念宣言「教会と国家にかんする信仰の宣言」序文より）